〔弘道館記〕

弘道館記

弘道者何人能弘道也道者何天地之大経而生民不可須臾離者也弘道之館何為而設也恭惟上古

神聖立極垂統天地位焉万物育焉其所以照臨六合統御　内者未嘗不由斯道也

宝祚以之無窮国体以之尊厳蒼生以之安寧蛮夷戎狄以之率服而

聖子神孫尚不肯自足楽取於人以為善乃若西土唐虞三代之治教資以賛

皇猷於是斯道愈大愈明而無復尚焉中世以降異端邪説誣民惑世俗儒曲学舎此従彼

皇化陵夷禍乱相踵大道之不明於世也蓋亦久矣我

東照宮撥乱反正尊

王攘夷允武允文以開太平之基吾祖　威公実受封於東土夙慕

日本武尊之為人尊神道繕武備　義公継述嘗発感於夷斉更崇儒教明倫正名以藩

屏於　国家爾来百数十年世承遺緒沐浴恩沢以至今日則苟為臣子者豈可弗思

所以推弘斯道発揚　先徳乎此則館之所以為設也抑夫祀

建御雷神者何以其亮天功於草昧留威霊於茲土欲原其始報其本使民知斯道之所

繇来也其営孔子廟者何以唐虞三代之道折衷於此欲欽其徳資其教使人知斯道之

所以益大且明不偶然也嗚嘑我国中士民夙夜匪解出入斯館奉　神州之道資西

土之教忠孝无二文武不岐学問事業不殊其効敬神崇儒無有偏党集衆思宣群力以

報　国家無窮之恩則豈徒　祖宗之志弗墜

神皇在天之霊亦将降鑒焉設斯館以統其治教者誰権中納言従三位源朝臣斉昭也

天保九年歳次戊戌春三月斉昭撰文并書及篆額

《参考》　擡頭……最高の敬意を表す語句（神聖・宝祚・神皇など）は、文の途中であっても改行し、一字分を突出させて表記する。

（抬頭）　平出……右についで敬意を表す語句（東照宮・日本武尊・建御雷神など）は、文の途中であっても改行し、突出はしない。

闕字……表敬第三位にあたる語句（威公・義公・国家・先徳・神州など）は、一字～三字の字間をあける。

（訓読文）

弘道とは何ぞ。人、よく道を弘むるなり。道とは何ぞ。天地の大経にして、生民の須臾も離るべからざるものなり。弘道の館は、何のために設けたるや。恭しく惟みるに、上古、神聖、極を立て統を垂れたまひて、天地位し、万物育す。その六合に照臨し、　内を統御したまひし所以のもの、未だ嘗て斯道に由らずんばあらざるなり。宝祚、これを以て無窮、国体、これを以て尊厳、蒼生、これを以て安寧、蛮夷戎狄、これを以て率服す。しかも聖子神孫、なほ肯へて自から足れりとせず、人に取りて以て善をなすことを楽しみたまふ。すなはち西土唐虞三代の治教のごときは、資りて以て皇猷を賛けたまへり。ここに於て、斯道いよいよ大に、いよいよ明らかにして、また尚ふるなし。中世以降、異端邪説、民を誣ひ世を惑し、俗儒曲学、此を舎てて彼に従ひ、皇化陵夷し、禍乱相踵ぎ、大道の世に明らかならざるや、蓋しまた久し。

我が東照宮、撥乱反正、尊王攘夷、允に武、允に文、以て太平の基を開きたまふ。吾が祖威公、実に封を東土に受け、夙に日本武尊の為人を慕ひ、神道を尊び、武備を繕む。義公、継述し、嘗て感を夷斉に発し、さらに儒教を崇び、倫を明らかにし、名を正し、以て国家に藩屏たり。爾来百数十年、世、遺緒を承け、恩沢に沐浴し、以て今日に至れり。すなはち苟しくも臣子たる者は、豈に斯道を推し弘め、先徳を発揚する所以を思はざるべけんや。これすなはち館の、為に設けられし所以なり。そもそも、夫の建御雷神を祀るは何ぞ。その、天功を草昧に亮け、威霊をこの土に留めたまへるを以て、その始を原ね、その本に報い、民をして斯道の繇りて来るところを知らしめんと欲するなり。その孔子廟を営むは何ぞ。唐虞三代の道、ここに折衷するを以て、その徳を欽い、その教を資り、人をして斯道のますます大にして且つ明らかなる所以の、偶然ならざるを知らしめんと欲するなり。

嗚嘑、我が国中の士民、夙夜解らず、斯の館に出入し、神州の道を奉じ、西土の教を資り、忠孝二无く、文武岐れず、学問・事業、その効を殊にせず、神を敬ひ儒を崇び、偏党あるなく、衆思を集め群力を宣べ、以て国家無窮の恩に報いなば、すなはち豈にただに祖宗の志、墜ちざるのみならんや、神皇在天の霊も、またまさに降鑒したまはんとす。

斯の館を設けて、以てその治教を統ぶる者は誰ぞ。権中納言従三位源朝臣斉昭なり。

天保九年歳次戊戌春三月、斉昭、撰文、并びに書、及び篆額

（日本思想大系『水戸学』より）

（大意）

「弘道館記」は、問答体の文章で書かれており、内容を簡単にまとめると次のようになります。

まず最初に「弘道とはどういうことか」という問いに対し、「人が道を弘めるのであり、道が自然に弘まるのではない。我々の努力によって道は弘まり、また維持されるのである」と説いています。

次に「では、道とは何であるか」という問いに対し、「道とは、天地（自然界）における大きな秩序であり、人が生きていくための最も大切な筋道のことである」と説いています。

そして「弘道館を設立した目的は何であるか」という問いに対しては、「日本では、古来、天照大神をはじめ、神武天皇などによって示された国の秩序や正しい人としての道によって政治が行われてきた。歴代天皇は外国からも善いものがあれば採用し、この道を発展させてきた。中世には一時その道が見失われようとしたが、徳川家康は乱世を治め、皇室を敬い尊び、外国の圧力や間違った考えを打ちはらって太平のもとを築いた。特に水戸藩では、初代藩主頼房や二代藩主光圀により、神道を尊び、儒教をあがめ、皇室や幕府に対し臣民としてなすべき道の伝統がつくられてきた。その恵みに浴してきた我々は臣下として、また領民として、この道を弘め先祖の徳を輝かし、いかに発展させるべきかを深く思い考えなければならない。そのために弘道館を設立したのである」と、弘道館設立の趣旨を説いています。

さらに「弘道館に鹿島神社を建て建御雷神を祀る理由は何であるか」という問いに対して、「建御雷神は、日本建国の際に天照大神をお助けになり、常陸国に鹿島神宮の御祭神として鎮座されているので、人々に日本の道の根源は遠く神代にあることを知らしめるためである」と説き、「では、孔子廟を建てた理由は何であるか」という問いに対しては、「孔子の徳を敬い、儒教を採用することにより、日本の道が益々宏大にかつ明らかになったということを知らしめるためである」と説いています。

最後に結論として、水戸の士民が朝から晩まで精神を集中して弘道館で学び、忠孝一致、文武一致、学問事業一致、神儒一致に留意して、みんなの考えを集め、すべての人の力を伸ばして国家から受ける限りなき恩恵に報いるべきであるという、弘道館の教育方針と学生としての心得が示されています。

そして末尾には、弘道館という学校を建て、政治と教育の一致をはかり、統率する者は権中納言従三位源朝臣斉昭（徳川斉昭）であり、自ら「弘道館記」を撰文し書いたことを明記しています。